

ジャン＝ジャック・ルソーのレトリック(2) 『ボルド氏への最後の回答』における水掛け論批判

問題を論じる古い方法を捨てたとき、
問題それ自体をも遠ざけてしまったことに、
人々は気がつかなかった。

(T.トドロフ「譬喩と文彩」)

越 森 彦

レクチュール・レトリック 修辞学的読解——その擁護と顕彰

レトリックという語の定義には「物言う術」(« l'art de parler ») のひと言で十分である。オラトリオ会士ベルナール・ラミ神父の卓見であった。1640年にル・マンで生まれ、神学者・数学者にしてレトリックの専門家という多才の人ラミの代表作『レトリックあるいは物言う術』の序文によれば、従来のように、レトリックを「説得するために巧く話す技術」と定義する必要はない。「説得するために」という補足説明は言わずもがなである。なぜなら、「私たちは自分の話を聴いている人たちを自分の意見の中に取り込むためにしか話さない¹」からだ。

ラミは正しい。物言うことは納得させること。私たちの言葉は相手を「自分の意見の中に取り込む」ために発せられる。人間が自分の帰属する集団の中で他者と生きる社会的存在でありながら、他者との意見の食い違いは避けられず、他者との摩擦を解消する手だとしては言葉しかないかぎり、

1 Bernard Lamy, *La Rhétorique ou l'art de parler*, Honoré Champion, 1998, p.103.

言葉は、レトリックは、説得の手段である。

このような前提に立ち、前稿に引き続き本稿でも、フランスの修辞学者オリヴィエ・ルブールが提唱した「^{レクチュール・レトリック}修辞学的読解」を実践する。つまり、議論文を技巧の面から分析し、「何が議論として説得力があり、そうでないのか、何が議論として正しく、そうでない²」のかを示したい。

しかし、それにしても、文学作品を読み解く方法が多様化するなかで、なぜ^{レクチュール・レトリック}修辞学的読解なのか。なぜ、よりにもよって、今さら修辞学、レトリックなのか。というのも、フランスの文芸批評家ツヴェタン・トドロフも指摘するように、レトリックは「人間が言語活動を意識した最初のあらわれ」であるにもかかわらず、「幾度かの盛衰を経て、徐々に、しかし19世紀のあいだには決定的に、衰退したように見える³」からである。たしかに、1960年代には「トポス」の研究とその作文教育への応用がアメリカを中心に盛んに行われ、レトリック・ブームとでも呼べる時期があった⁴。（トポスについては後述する。）また、フランスの文学理論家ジェラルド・ジュネットが広めた、文彩に「限定された修辞学」という見方に対する秀逸な批判もあった⁵。そして、何より、議論と説得を目的とする「新レトリック」の体系を構築したカイク・ペレルマンを忘れてはならない⁶。しかし、レトリックの教育的活用やレトリックそれ自体の研究はさておき、レトリック

2 Olivier Reboul, *Introduction à la rhétorique. Théorie et pratique*, Presses Universitaires de France, (1995), 2019, p.147.

3 ツヴェタン・トドロフ（菅野昭正・保莉瑞穂訳）：『小説の記号学 文学と意味作用』大修館書店 1974年 p.142.

4 香西秀信：「説得的言論の発想形式に関する研究（1）——修辞学の復活——」琉球大学教育学部『琉球大学教育学部紀要』第1部（29）1986年 p.72-90.

5 フランソワーズ・ドゥエ（黒木朋興訳）：「異議あり、フランスのレトリックは転義法に「限定」されていない」物語研究会『物語研究』（8）2008年 p.74-84。/ 黒木朋興：「フランソワーズ・ドゥエのジュネット『限定されたレトリック』批判について——レトリック研究の第一歩を目指して」物語研究会『物語研究』（8）2008年 p.85-93.

6 Chaim Perelman et Lucie Olbrechts-Tyteca, *Traité de l'argumentation*, Éditions de l'Université de Bruxelles, (1988) 2000.

の知見を活用した文学作品の読解となると手つかずの状態に近い⁷。

そもそもレトリックとは、日本では特にそう誤解されているように、「美辞麗句」でも「巧言」でも、「実質を伴わない表現上だけの言葉」（『大辞林』）でも「詭弁（に近い）と言っていいような巧妙な言い回し」（『新明解国語辞典』）でもない。少なくとも、それだけではないし、それが元来の姿なわけでもない。「言葉を美しく巧みに用いて効果的に表現すること」（『大辞泉』）を探索する学問、すなわち「修辞学」を意味する以前、レトリックは「弁論術」を意味していた。レトリックを初めて体系的に論じたアリストテレスが定義したように、レトリックとは「どんな場合にでも使用可能な説得の手段を見つける⁸」技術であった。その目的は何よりも「説得」であった。

レトリックは、プラトンが揶揄したような「化粧の術」ではない。たしかに、美的効果は追求する。しかし、それは説得的効果を高めるためである。レトリックはあくまで説得の技術、説得術なのだ。この意味において、レトリックはジャン＝ジャック・ルソーのように論争を好んだ作家の文章を読み解く武器になる⁹。

修辞学的読解の着眼点 —— 文彩と論法

修辞学的読解は主に二つの観点から作品を分析する。文彩と論法である。前者の文彩（figure de rhétorique）については詳しい説明を要さないだろう。隠喩、提喩、換喩といった「意味の文彩」だけでなく、同音節反復法（paronomase）、同子音反復法（allitération）、同語異義反復法（antanaclase）

7 数少ない例外の一つとして、また日本における先駆的实践として、以下の文献が挙げられる。香西秀信：『修辞的思考 論理でとらえきれぬもの』明治図書 1998年。

8 アリストテレス（戸塚七郎訳）：『弁論術』岩波文庫（1992年）1995年 p.31。

9 冒頭で述べたように、言語というものがそもそも説得の手段であるかぎり、ルソーだけでなく、どのような作家の文章に対しても修辞学的読解の門戸は開かれている。もちろん、作家や作品によってその適用範囲の違いはあるだろうが。

といった「語の文彩」も想起されたい。もちろん、省略法 (ellipse)、対照法 (antithèse)、漸層法 (gradation) といった「構文の文彩」や、諷諭 (allégorie)、皮肉法 (ironie)、暗示的看過法 (prétérition) といった「思考の文彩」も考察の対象となる。文彩は論の見せ方に関わる。論をより説得的な形に演出するのが文彩の役割である。

一方、論の立て方に関係するのが論法である。この語は、フランス語または英語のargument、および、「場所」を意味するギリシャ語のτόπος (トポス) に相当し、議論の内容を見つけるための「場所」、論証の拠り所を意味する¹⁰。議論の型と言ってもよいだろう。たとえば、節度ある生活の重要性を訴えたいとする。この場合、「反対論法」(argument *a contrario*) という論法を用いれば、「節度あることはよいことである。放縦は有害であるから。」というように、相反する命題を起点にした論の立て方が見分かるであろう¹¹。

アリストテレスは『弁論術』(第2巻第23章)で28種の論法を列挙しているが、それはあまりに雑然としているので、キケロは『トピカ』において大きく5類(17種)に整理している¹²。古典修辞学の知見を大学生の作

10 前稿「ジャン＝ジャック・ルソーのレトリック―『学問芸術論』における論点の変更」においては「議論法」という語を用いたが、「論の立て方」という意味をより強く喚起するために、本稿(以降)では「論法」に改める。

11 この例はアリストテレスの『弁論術』による。前掲書(注8)p.265。帝政期のローマにおいてレトリックを初めて一つの学術大系としてまとめあげたクインティリアヌス(35年頃-100年頃)は「反対論法」の例として以下を挙げている。「戦争が不幸の原因であるとすれば、平和は不幸の矯正である」。(クインティリアヌス(森谷宇一・戸高和弘・渡辺浩司・伊達立晶 訳):『弁論家の教育』(2)京都大学学術出版会 2009年 p.262。論法の詳細な説明については香西の前掲論文(注4)および以下を参照。三輪正:『議論と価値』法律文化社 1972年。(特に、第三部「議論のあらわれ型—議論の型—」) なお、論の立て方を人は自然に見出すのであって、その技法をわざわざ学ぶ必要はないとする見方もある。アントワヌ・アルノー、ビエール・ニコル(山田弘明・小沢明也訳):『ポール・ロワイヤル論理学』法政大学出版局 2021年。(第3部第17章「議論を見出すトポスあるいは方法について。この方法がいかに実用にならないか」)

12 キケロ(吉原達也訳):『トピカ』広島大学法学会『広島法學』34巻2号 2010年 p.92-66。

文教育に応用したエドワード・コーベットも、その教科書『現代学生のための古典修辞学』では、議論のテーマが何であれ使用できる「共通の論法」としてやはり5類（17種）に分類している¹³。（ただし、「固有の論法」としてさらに3類ある。）

さて、修辞学的読解の立場からルソーの作品に対して問いたいのは以下の3点である。

- ①ルソーが対論者を説得する際、その言論を特徴づける文彩と論法は何か。
- ②それらの文彩または論法が、それが使用された文脈において一定の説得力をもつ、またはもたないのはなぜか。
- ③ルソーが頻繁に用いる文彩と論法を幾つかの型（パターン）に分類できないか。

以上の①から③の問いは、より大きな一つの問いへと繋がっている。それは、使用する文彩と論法から見て、論者としてのルソーの個性とはいかなるものか、という問いである。論の見せ方と論の立て方の両方をまとめ、文体ならぬ論体と呼べるのであれば、ルソーの論体を明らかにしたいのである。

もちろん、このような問いは即座に答えを出せるものではない。多数の文例を収集するためにも、まずは初期のものから一作ごとにルソーの説得的言説（説得を目的とする言説）を分析する必要がある。その一環として、本稿では、前稿で取り上げた『学問芸術論』の言わば続編である『ボルド氏への最後の回答』を分析対象としたい。この小品は、シャルル・ボルド（1720-81）というリヨンのアカデミー会員に対する反駁の書である。同アカデミーにおいて、1751年6月、ボルドは「学問と芸術の恩恵について」

13 Edward P. J. Corbett, Robert J. Connors, *Classical rhetoric for the modern student*, Oxford University Press, (1965) 1991.

と題された講演を行い、同年12月の『メルキユール』誌に『学問芸術恩恵論¹⁴』を発表した。タイトルからも察せられるように、この論文は、文明の進歩をありがたがる風潮を批判した『学問芸術論』に対する真っ向からの反論である。そして、この『学問芸術恩恵論』に対する再反論（反駁）として翌年の4月にルソーが発表した論文が『ボルド氏への最後の回答』である。ちなみに、ボルドはルソーの古い友人であり、ルソーのリヨン滞在中に援助の手を差し伸べた恩人である。実際、ルソーはボルドに謝意を表すために書簡詩まで捧げている。しかし、だからといって、論難に手心を加えるルソーではない。

ルソーの主張とボルドの反論、さらに、それに対するルソーの反駁、それぞれについて主な内容と論証方法を明らかにしていこう。まずはルソーの主張から。

I ルソーの主張 —— 実用主義論法

デビュー作の『学問芸術論』でルソーは以下のように論じていた。

我々の学問は、その掲げている目的からすれば虚しいものでしかありません。ところが、そのもたらす結果からすれば、学問は危険ですらあるのです。およそ学問というものは無為から生まれます。そして、今度はその同じ学問が無為を育むことになります。こうして、取り返しがつかないほどの時間が失われていきます。これは、学問が社会にもたらす必然的な害悪の始まりと言えるでしょう。国家との関わりという面からすれば、他者との関わりにおいてもそうですが、善い行い

14 Charles Bordes, *Discours sur les Avantages des Sciences et des Arts*, 1751. 以下の文献に全文が収録されている。Jean-Jacques Rousseau, *Mémoire de la critique*, textes réunis par Raymond Trousson, Presses de l'Université de Paris-Sorbonne, 2000. 本稿におけるボルドの引用は本書による。

を何もしないというのは大悪です。国家に無用の市民は不穏分子と見なされても仕方ないのです¹⁵。(下線筆者)

複数の論法が周到に張り巡らされているが、さし当たっては、「そのもたらす結果からすれば」(« par les effets qu'elles produisent »)という前置詞句、とりわけ「結果」(« les effets »)の一語に着目されたい。引用箇所の議論を支えているのは実用主義論法 (l'argument pragmatique) である。ペレルマンはこれを「帰結によって事柄を評価する¹⁶」論法と定義している。この論法における評価の基準はあくまで「帰結」であって、発端や過程は度外視される。ペレルマンによれば、この論法の使用により、「ちょうど実用主義哲学におけるように思想の真偽はその結果によって判断され、企業の失敗や生活の蹉跌がその無暴^マさや虚偽性の証拠とされる¹⁷」という。逆に言えば、ある企業がどれほど「無謀」な経営をしたとしても、あるいは、ある人の生活がどれほど「虚偽」に満ちていたとしても、結果的に成功を収めているのであれば問題はない。「終わり良ければすべて良し」というわけである。

ただし、ルソーの議論では「終わり良ければすべて良し」とは逆向きの論理が働いている。つまり、「終わり悪ければすべて悪し」である。学問それ自体はその「目的」からすればせいぜい「虚しい」ものにすぎないかもしれない。しかし、学問が盛んになれば、その「結果」として無為がはびこり、さらにその「結果」として本来なら国家や周囲の人々に捧げるべ

15 Jean-Jacques Rousseau, *Discours sur les Sciences et les Arts, dans Œuvres complètes* t. III, 1964, Gallimard, « la Bibliothèque de la Pléiade », édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond (1959-1995, 5 vol.), p.18. 以下、ルソーの文章についてはこの版を典拠とし、O.C. III, p.18. のように記す。フランス語を引用する場合、綴りは現代のものに直す。なお、訳文はすべて筆者による。

16 カイム・ペレルマン (三輪正訳) : 『説得の論理学 新しいレトリック』理想社 1980年 p.127.

17 同書 p.128.

き時間が「取り返しがつかないほど」失われ、さらにその「結果」として「不穏分子」と見なされても仕方のない連中が跋扈することになる。だから、学問は「危険ですらある」とルソーは主張する。学問の中身や「目的」はこの際どうでもよい。その「結果」の良し悪しだけがすべてなのだ。

ペレルマンも指摘しているように、結果によって原因の価値（良し悪し）を判断することはごく普通に行われているため、それをするための理由付けや正当化は不要である¹⁸。そのため、ルソーの議論はごく自然なものとして読者の目に映る。また、ルソーの指摘している「結果」（学問の弊害）の数々はどれもその内容が明快であり、その分だけ主張の説得力も増している。とはいえ、実用主義論法に基づくルソーの議論に問題がないわけではない。反論は可能である。

実用主義論法への反論法

近年刊行されたレトリック関係の書物の中で最も網羅的かつ明快な啓蒙書『説得力のある言葉』の著者であるベルトラン・ビュフォンが手際よくまとめているように、一般的に、実用主義論法にはその「適用方法」と「原則それ自体」という2つ方向からの反論が考えられる¹⁹。

まずは「適用方法」から見てみよう。実用主義論法に訴える論者は、ある事柄に評価を下すために、その事柄が引き起こす結果に着目する。問題は、その着目された結果以外にも他の結果が実はある（かもしれない）ことだ。ルソーは学問のもたらす結果として、「無為」と時間の喪失および「不穏分子」の跋扈を指摘する。それは、それ自体としては事実なのかもしれない。しかし、こうした否定的結果以外に学問は何ももたらさないのだろうか。もちろん、否である。医学の発達による特効薬の開発のような肯定

18 同書 p.127.

19 Bertrand Buffon, *La parole persuasive*, Presses Universitaires de France, 2002, p.180.

的結果も学問はもたらしている。ゆえに、次のような反論が考えられる。

「多少の害悪はあるにせよ、学問にはそれを上回る恩恵がある。「危険」であるという理由で学問を規制するのは、角を矯めて牛を殺すようなものだ。(あるいは、フランス式に言えば、風呂の水と共に赤ん坊を流すようなものだ。)」

ただし、ボルトがこのような反論をしたとしても、その反論の有効性はかなり限定的であろう。なぜなら、『学問芸術論』とはまさに、学問（と芸術）のもたらす害悪が恩恵を遙かに上回ることを豊富な事例とともに論証した作品だからである。また、仮に、学問の恩恵が害悪を質量の面で上回ることを証明できたとしても、ルソーに対する反論としては脆弱なままであろう。というのも、恩恵と思われていたものも実は害悪に他ならないのだ、という再反論が成り立つからである。害悪に他ならないものが恩恵と思われてしまう。これ自体が学問のもたらす害悪なのだ。

では、二つ目の反論法を見てみよう。それは、実用主義論法の「原則それ自体」を攻めることから成る。あるいは、より正確に言うならば、「原則それ自体」が生み出す行き過ぎを指摘する。実用主義論法の原則とは何か。それは結果の重視である。これ自体は日常の議論において頻繁に行われており、とりわけて批判の対象になることはない。しかし、結果に重きを置くあまり、成功至上主義に墮した場合は別である。たとえば、次のような批判があるかもしれない。

「あなたは成功至上主義の罠に落ちている。行為の成功に満足し、その行為を導いた意図の内実を不問に付している。」

実際、悪しき意図に導かれた行為が成功した事例はいくらでもある。あるいは逆に、惨めな失敗に終わったとしても、その行為を導いた意図自体は賞讃に値するという場合も十分にありうる。しかし、成功至上主義者は、善意から始めた行為でも失敗に終わればその行為を愚行と貶すだろう。も

ちろん、このように善行を貶すことも批判の対象となる。

ただし、今問題にしている論争の流れにおいて、成功至上主義者のレッテルをルソーに貼り付けることは難しい。たとえば、次のように反論したとしよう。

「たしかに学問は無為を産み出したかもしれない。しかし、学問を産み出した人々の意図そのものは賞讃に値するのだ。結果ばかりに目が行って、その原因の尊さをあなたは忘れている。」

このような反論を試みても、おそらく無駄である。というのも、ルソー自身がそのような反論はとっくに見越しており、『学問芸術論』第2部の冒頭から予防線を幾重にも張り巡らせ、学問を産み出した人々の「迷信ぶり」、「野心」、「憎悪」、「追従口」、「虚言」、「貪欲」、「無益な好奇心」、「傲慢さ」を矢継ぎ早に糾弾しているからである。

実は、実用主義論法に基づいた意見に反論する方法としては三つ目がある。それは、実用主義論法が基盤としている因果性、すなわち原因と結果の関係を洗い出すことである。実用主義論法を用いる論者は以下のように考えている。つまり、Aという事象が原因となり、Bという事象が結果として生じ、そのBが有益（または有害）であるならば、Aも有益（または有害）である。そうであるならば、この考え方の前提となっている因果関係（Aが原因でBは結果）を疑ってみることは、実用主義論法に対する反論の糸口となるだろう。たとえば、以下のように問いつめてみる。

「Aが発生した後に、たまたまBが起こっただけなのではないか。継起性（Aの後にB）と因果性（AのためにB）をあなたは取り違えているのではないか。」

このような「原因誤認による短絡的推理²⁰」をラテン語では端的に« post

20 野内良三：『レトリック辞典』国書刊行会（1998年）2005年 p.245.

hoc, ergo propter hoc » (その後、ゆえに、その故に) という²¹。ルソーの場合に当てはめてみれば、次のような反論が考えられるだろう。

「無為が時間の喪失をもたらし、そこから国家に不要の市民(「不穏分子」)が生まれたというのが仮に事実だとしよう。しかし、無為をもたらしたのが学問であるとは何故言えるのか。学問が発達した後にたまたま無為が生じただけなのではないか。」

学問と無為の因果関係をルソーが十分に証明していないかぎり、この反論は一定の有効性を持つであろう。実際、『百科全書』の序文でダランベールはそのように反論している²²。では、ボルドの場合はどうだろうか。

II ボルドの反論 —— 水掛け論と反論の二つの型

『学問芸術恩恵論』と題された論文でボルドは以下のように反論している。

学問は無為から生まれたというのは、明らかに言葉の乱用です。学問とは余暇から生まれるものです。しかし、それでいて無為からは守ってくれます。必要に駆られて農作業ばかりしている市民よりも、幾何学者あるいは解剖学者のほうが忙しいぐらいなのです。もちろん、農業が必要不可欠であることは認めます。しかし、パンが必要だからといって、すべての人が大地を耕すべきなのでしょう。法律よりも

21 「前後即因果の虚偽」や「前後関係＝因果関係の誤謬」という名称もある。ジョージ・W・ジーゲルミュラー、ジャック・ケイ (井上奈良彦監訳)：『議論法 探求と弁論 第3版』花書院 (2006年) 2007年 p.135, p.177。/ ナイジェル・ウォーバートン (坂本知宏訳)：『思考の道具箱 クリティカル・シンキング入門』晃洋書房 2006年 p.136。

22 ダランベールは習俗の頹廢と学芸の進歩の因果関係を疑い、以下のように反論している。「私たちは、彼(＝ルソー)が学問と芸術のせいにする害悪の大部分はまったく別の諸原因——それをここで枚挙するのは長くもなりこまかい配慮の必要なことであろうが——に帰すべきではないかどうか、彼が吟味してくれることをお願いする。」(デイドロ、ダランベール編 (桑原武夫訳編)：『百科全書 序論および代表項目』岩波書店 (1971年) 2000年 p.135。

必要なのはパンなのだから、裁判官や大臣よりも農夫のほうが偉いということになるでしょうか。そのような考え方はまったく馬鹿げているとしか言いようがありません²³。

これだけを読むと、かなり力強い議論文である。しかし、ルソーに対する反論という意味では、ボルドは二重のミスを犯している。まず、目の付け所を誤った。

学問は危険である。なぜなら無為を育むからだ。

これがルソーの主張とその理由である。ボルドはこれに反論すべきであった。しかし、「学問は無為から生まれる」という、確かにルソー自身の主張ではあるものの、あくまで前置きの述べられた副次的主張に批判の矛先を向けてしまっている。ルソーの文章をもう一度読んでみよう。

我々の学問は、その掲げている目的からすれば虚しいものでしかありません。ところが、そのもたらす結果からすれば、学問は危険ですらあるのです。およそ学問というものは無為から生まれます。そして、今度はその同じ学問が無為を育むことになります。こうして、取り返しがつかないほどの時間が失われていきます。これは、学問が社会にもたらす必然的な害悪の始まりと言えるでしょう。(下線筆者 O.C. III, p.18.)

文章全体に置き直してみれば、「学問は無為から生まれる」というボルドが非難している主張が、「学問は無為を育む」という主張を唱えるための前置きに過ぎないことは明らかであろう。さらに、ボルドは「言葉の乱用」という新たな問題を提起することで、「分離論法」(l'argument par

23 *Ibid.*, (note 14), p.77.

disjunction) に走ってしまった。(この論法については後述する。)つまり、ルソーの実用主義論法に反論するために、ボルドはそれとは別の論法(分離論法)を用いてしまい、実用主義論法そのものに対する反論をしていない。これが二つ目のミスである。

この二つ目のミスはおそらく、ボルドにとって不幸な結末を招いた。この点を明らかにするために、その前段階として、有効な反論には一つの型しかないことを確認しておこう。

唯一有効な反論の型 —— 「論証型反論」

アリストテレスは『弁論術』(第2巻第26章)で「反駁を目的とする説得推論」には二種類あるとしている。

反駁は明らかに、論証を試みるか、或いは異論を持ち出すことによって行われるのであるが、前者にあつては、相手の証明に対抗して、それと反対の命題を論証によって導く(後略)。例えば、相手が、何かが起こったと証明した場合には、こちらは、それは起こらなかったと証明し、もし相手が、起こらなかったと証明した時には、起こったと証明するのである。(中略)

また、それ(=異論)は、(中略)、或る見解を述べ、この見解によって、相手の結論が正しい推論によって導かれたものでないことを、或いは、その前提になんらかの誤りが含まれていることを、明らかにするものなのである²⁴。

アリストテレスがここで言う「反駁」(lysis)は、「論駁」とも訳され、

24 アリストテレス 前掲書(注8) p.301.

その原義は「相手の論を分解し空虚にする²⁵」ということだが、そこまでの深い意味を求める必要はここではない。『弁論術』の訳者に従って、対論者の意見に反対するという、通常の意味での「反論」を指すことが確認できれば十分である²⁶。さて、アリストテレスによれば、反論には二種類ある。一つ目は、対論者とは「反対の命題」を論証しようとすることで成り立つ反論で、アリストテレス自身は引用箇所とは別の箇所「反対の推論²⁷」と呼んでいる。これは表現として分かりにくい。修辞学者の香西秀信は明快に「主張型反論」と呼んでいる。二つ目は、対論者の「推論」やその「前提」の不備を指摘することで「結論」の間違いを「明らか」にする反論であり、アリストテレスはこれを「異論」と呼んでいる。これについても香西はより平明に「論証型反論」と呼んでいる²⁸。まとめれば、「主張型反論」は対論者の意見と反対の意見を主張するのに対し、「論証型反論」は対論者の論証に弱点を見出し、そこを徹底的に攻める。

両者に優劣の差はあるのだろうか。香西によれば、19世紀イギリスの修辞学者リチャード・ウェイトリーは「主張型反論」は「厳密な意味で反論ではない」と考え、次のように述べたという。

[主張型反論が反論であるのは] たまたまそうなったというにすぎない。なぜならそれは、たとえ対立する議論が存在しなくても、全く同じ形でひとつの独立した議論となりうるものであるから。そして、実際に、ある人の主張が、それを聞いたこともない別の人の議論によって、結果として反論されたかたちになってしまうことは、しばしば起

25 同書 p.479.

26 「[反駁は] 広い意味での反論である。」(同書 p.479.)

27 同書 p.296.

28 香西秀信：『反論の技術 その意義と訓練方法』明治図書（1995年）2019年 p.11.

こることである²⁹。

反論とは、対論者の意見に反対する意見である。対論者の意見あつての意見である。対論者の意見を前提にせず、「ひとつの独立した議論」として存在している意見というものは、個人の考えや「心に思うところ」（『大辞泉』）ではあつても反論とは言えないのではいのだろうか³⁰。「主張型反論」は相手の意見から離れ、言わば単独で宙に浮いているような状態の言説である。反論の名に値する意見は「論証型反論」だけであろう³¹。少なくとも、ルソーに対するボルドの反論文を読むかぎり、そのように言える。

ボルドの「主張型反論」

「学問は無為から生まれた」というルソーがあくまで付随的に述べた主張に対し、ボルドは「明らかに言葉の乱用です。」とやり返している。さすがに、「学問は無為から生まれたのではない」と反対命題を露骨に唱えることはしていない。しかし、これが「主張型反論」であることに変わりはない。なぜなら、ボルドは、「学問とは余暇から生まれるものです。」と論を続けているからである。つまり、余暇から生まれたのだから学問は無為から生まれたのではない、というように対論者のルソーが持ち出したのとは別の根拠でもって、ルソーとは反対の主張を論証しようとしている。これは「主張型反論」そのものである。

そのことによって何が起こったか。ボルドの議論はルソーのそれと争点

29 同書 p.11.

30 「主張型反論」が相手の意見を否定する反論になり得るのは、アリストテレスが例として挙げているように、「何かが起こった」または「起こらなかった」ような場合である。このような場合には二者択一的な答えしか考えられない。それゆえ、どちらかの選択肢の否定は、もう一つの選択肢の肯定となる。

31 戸田山和久は「反対な論」と「論に反対」という呼称を用い、後者の重要性を訴えている。前者が「主張型反論」に、後者が「論証型反論」にそれぞれ対応する。戸田山和久：『思考の教室 じょうずに考えるレッスン』NHK出版 2020年 p.276-280.

が噛み合っていない。水掛け論に終始している。たしかに、ボルドの議論はそれだけを「ひとつの独立した議論」として捉えるならば、主張も根拠も明快であり、それ相応の説得力を有している。ルソーの意見を真っ向から否定しているようにも見える。しかし、実は、自分の意見をルソーの意見と並立させているだけにすぎない。ルソーの意見そのものを切り崩していない。しかも、先に述べたように、その意見はルソーが副次的に前置きとして述べたものにすぎないのである。

「学問は余暇から生まれた」とボルドは主張する。しかし、たとえそれが仮に事実であったとしても、「学問は無為から生まれた」というルソーの意見はびくともしないだろう。余暇と無為の両方から生まれた可能性もあるからだ。自分の意見をいくら論証してみたところで、相手の意見を否定することにはならないという見本がここにある。

Ⅲ ルソーの反駁 —— 漸層法と追加法

ボルドの「主張型反論」は『学問芸術恩恵論』のほぼ全体を覆っている。少なくとも、ルソーはそのように受け取った。だからこそ、以下のように糾弾するのである。

〔『学問芸術恩恵論』に書かれていることの〕すべては真実であることが証明されている。そう認めたところで、私には痛くも痒くもありません。というのも、ボルド氏は幾多の主張を臆面もなく述べられていますが、問題の根底に触れているものはほとんどなく、私に対するまともな反論となるようなものはさらに少なく、仮に、まともな反論になるようなものがあつたとしても、それすらもそのほとんどは、私の主張に新しい論拠を与えてくれるようなものばかりなのです。もし私の主張が新しい論拠を必要とするならばの話ですが。（下線筆者

『学問恩恵論』に対する激しい苛立ちが伝わってこないだろうか。下線を引いた三つの語句に注目されたい。「ほとんどなく」(« très peu »)は「さらに少なく」(« moins encore »)に、「さらに少なく」は「それすらも」(« même »)にそれぞれ引き継がれ、語句と語句が引き継がれるたびにボルドに対する苛立ちの度合いが段階的に強くなっている。「ほとんどなく」・「さらに少なく」・「それすらも」は三位一体となって漸層法(gradation³²)を形作っているのである。また、末尾にある、「もし私の主張が新しい根拠を必要とするならばの話ですが。」という補足の条件文(原文では副詞節)が「追加法」(hyperbate³³)として機能し、漸層的列叙を効果的に締めくくっている。

実際、ボルドの提供する「新しい論拠」はルソーにとっては無用の長物でしかない。その理由としては以下の3点が挙げられている。まず、ボルドが「臆面もなく」並び立てた「主張」のほとんどすべては『学問芸術論』における議論に関係がない。論外である。次に、目下の議論に関係のある「主張」があったとしても、ルソーに対する反論になっていない。さらに、

32 文法家にして文彩の専門家としてもその名が知られるピエール・フォンタニエ(1765～1844)は以下のように定義している。「漸層法は、一連の観念や感情を提示する際に、後続するものが先行するものよりも意味が強まるか弱まるかのどちらかになるように配列する。意味が上昇的に強まるか、下降的に弱まるかは観念や感情の発展具合による。」(Pierre Fontanier, *Les figures du discours*, 1977, Champs-Flammarion, p.333.)

33 「追加法」という訳語は野内(注20)による。「転置(法)」(『ロベール仏和大辞典』)という訳語もある。なお、hyperbateには二種類ある。①文が終わったと思わせておいたところに、あたかも言い忘れたかのように最重要情報を付け足すもの。「追加法」または「語句追加」と訳される。②「そこに流れる、澄んだ小川が。」のように語順を転倒させ、末尾の語句を目立たせるもの。「語順転置」と訳される。フォンタニエは、hyperbateをinversion(倒置法)の一種としている。(Ibid., p.284.) Cf. オリヴィエ・ルブール(佐野泰雄訳)：『レトリック』白水社2000年 p.47. / 佐々木健一(監修)：『レトリック事典』大修館書店2006年 p.37, p.432. / Bernard Dupriez, *Gradus, les procédés littéraires*, « 10/18 », 1984, p.236-237.

反論になっていたとしても、反論されているルソー自身が自説の根拠として使えそうな主張ばかりである。反論としてはまったく弱い。このように、激しい苛立ちとともに全面否定されているボルドの反論文だが、実際にはどのような内容のものだったのだろうか。引用箇所の直前で、ルソーはボルドの「学説」を実に二頁近くを費やして延々と引用している。その内容を段落ごとに、できるだけ単純な命題の形にしてまとめてみよう。

- ①人間は生まれつき邪悪である。社会が形成される以前は獣のように野蛮で惨めだった。
- ②ギリシャだけがその精神の力によって野蛮状態から抜け出すことができた。また、何人かの哲学者たちは良き習俗を育み、法律を作成した。
- ③（ルソーの讚えた）スパルタは自らの選択によって質素と無知を選んだが、その法律には重大な欠点があり、市民は放っておけばすぐに墮落してしまう状態にあった。
- ④アテナイとローマの没落は学芸の隆盛が原因ではない。
- ⑤広大かつ強大な君主国では国家の繁栄と学芸の興隆および武徳の涵養は相乗作用の関係にある。
- ⑥現代の習俗は人間がもちうる最良のものである。たしかに、現代にもいつかの悪徳は残存している。しかし、それらの悪徳は人間性に固有のものであり、学芸の発達とは無関係である。
- ⑦奢侈も学芸の進歩とは関係がない。また、大国には奢侈が必要不可欠である。
- ⑧礼節は悪徳ではなく美德である。
- ⑨たしかに、学問が自らの目的に到達することは稀であり、真理の認識において人間の歩みは緩慢である。しかし、人間の進歩を止めることはできない。その必要もない。
- ⑩学問と芸術の流行によって柔弱な精神の持ち主が増えたとしても、野

蛮な尚武の気風が広まるよりもましである。

以上、ボルドの主張はその一つ一つが『学問芸術論』のアンチテーゼとなっている。たとえば、⑧の「礼節は悪徳ではなく美德である。」を裏返せば、「礼節は美德ではなく悪徳である。」となり、これはそのまま『学問芸術論』の主張となる³⁴。しかし、「礼節は悪徳である。」と主張する論者(ルソー)に対し、反論者(ボルド)が「礼節は美德である。」といくら主張し、また仮に論証に成功したとしても、それは「主張型反論」のレベルに留まり、相手の主張そのものを否定していない。なぜなら、礼節は美德か悪徳かのどちらか一つしかないというのでないかぎり、礼節が美德であるということは、礼節が悪徳ではないことを意味しないからである。礼節は同時に美德であり悪徳であるかもしれないし、そのどちらかでもないかもしれないからだ。反論された側はそのように主張して逃げられる。また、もしそうせずに、礼節は美德であると主張し続けるのであれば、議論は永遠に平行線を辿るだろう。

論争と引用

ボルドの「主張型反論」にルソーはどう応えたか。学問は無為を産み出すので「危険」であるという従来の主張や、学問は無為から生まれるという、ボルドが否定しようとした主張を再び論証しようとしたのだろうか。否。それでは「主張型反論」に対し「主張型反論」で応えることになり、互いの主張が交わらないまま、議論は無益な報復合戦になってしまうだろう。

ルソーは「論証型反論」でボルドに応戦した。つまり、ボルドの論証に

34 ただし、①は例外である。①を裏返せば、おおよそ、「人間は生まれつき善良であった。社会が形成される以前は幸せに暮らしていた。」となる。この考えは『人間不平等起源論』に初めて登場する。『学問芸術論』ではまだ見られない。ボルドとの論争を通じてルソーが自己の思想を深めたことの一つの証左であろう。

弱点を見出し、そこを徹底的に攻めたのである。

「学問は無為から生まれたというのは、明らかに言葉の乱用です。学問とは余暇から生まれるものです。しかし、それでいて無為からは守ってくれます。」無為と余暇の区別というのが私には何とも解せません。ただ、それにしても、誠実な人間であれば、なすべき善行、奉仕すべき祖国があり、救済すべき貧者がいるかぎり、余暇があっても誇りには思わないはずです。こうした私の考えに照らし合わせても、この余暇という言葉にはまともな意味があるのだというのであれば、ぜひともそれを見せてほしいのです³⁵。

ボルドと違い、ルソーは対論者の文章を引用している³⁶。引用された文章は、原文のフランス語ではイタリック体になっている。(訳文では「」に入れた。)この引用箇所のみならず、あるいは、ボルドに対してのみならず、ルソーは論争において対論者の文章を頻繁に引用する。それに対し、ルソーの対論者による引用は稀である。少なくとも、ルソーほどには引用しない。

なぜ、ルソーは引用するのか。それも、イタリック体によって引用文で

35 O.C. III, p.91-92.

36 ただし、ルソーの引用は正確ではない。ボルドの原文では、「学問とは余暇から生まれるものです。」の前に「たしかに」(« il est vrai »)という譲歩を表す語句があったが、ルソーの引用では抜けている。ただし、これによって原文の意味が歪められているわけでもないし、ルソーが語句の抜け落ちを悪用して自説を展開しているわけでもない。文学的手段としての引用については、以下の文献を参照。篠田勝英・海老根龍介・辻川慶子(編)：『引用の文学史 フランス中世から二〇世紀文学におけるリライトの歴史』水声社 2019年。また、ルソーは、論敵の出方次第では、歪曲の引用も辞さない。この点については拙稿を参照。越森彦：「ルソーによる、ルソーのためのカリカチュア：「礼節」を込めて」首都大学東京都市教養学部人文・社会系 東京都立大学人文学部 『人文学報』(406), 2008-03, p.17-38.

あることが読者にはっきりと分かるようにして³⁷。

対論者の文章を引用せずに反論すると印象論になりやすい。対論者の文章という客観的に存在する資料に依らないで、対論者の文章から受けた主観的判断に基づいて論じてしまう。これでは議論にならない。それを防ぐために引用する。これが、引用する理由としてまず考えられる。あるいは、対論者はそうせずとも自分だけはきちんと引用し、公正な議論を求める論者というエートス（信頼に足る自己像）の創出を狙っている可能性もある。しかし、なにより、ルソーにとって引用は「論証型反論」の布石となっている。

学問は余暇から生まれた。

これは一般命題である。これに反対命題をいくら唱えたところで、それは「主張型反論」でしかない。議論は平行線を辿ったままになるだろう。それを防ぐには、まず、対論者の具体的な議論を明示的に引用する必要がある。つまり、「学問は無為から生まれたというのは、明らかに言葉の乱用です。学問とは余暇から生まれるものです。しかし、それでいて無為からは守ってくれます。」という、ボルド自身の言葉を引用する。次に、引用文と自分の反論を括り付ける。つまり、ボルドの論の立て方、論法を切り崩すのである。

ボルドは、「無為」と「余暇」という似て非なるものをルソーが混同していると非難している。先に述べたように、分離論法に飛びついたのである。分離論法とは、本来は別々の事柄や概念を作為的に同類扱いしているとして対論者を責める論法である³⁸。この論法に対するルソーの反応は敏感であり、その反論は的確であった。「無為」と「余暇」の区別について「何

37 本稿に引用した箇所において、ボルドは、「学問は無為から生まれる。」というルソーの一文を引いている。しかし、イタリック体や引用符は使用していない。引用文であることを明示していない。

38 Perelman, *op. cit.*, (note 6), p.550-551.

とも解せません」と言下に退けておきながら、実際には、「余暇」という語には議論に値する「まともな意味」がないことを論証し、「無為」と「余暇」の区別という論の立て方（分離論法）そのものを無効化している。

分離論法に手を出すことでボルドはルソーの実用主義論法を無視した。それに対し、ルソーはボルドの議論が分離論法に立脚していることを見抜き、分離論法そのものを攻撃している。「論証型反論」をしたのである。これは、ボルドの水掛け論に対する唯一可能で有効な対抗手段であった。

結論 —— 意味中心主義的読解への抵抗と挑戦

エマニュエル・カントの『美と崇高の感情に関する観察』への覚え書きと称される断片集がある。そこには、『エミール』に夢中になるあまり日課の散歩を取りやめた哲学者の証言として以下のような文章が残されている。

趣味を持つことは悟性に対して重荷である。私は表現の美しさが、私をもはや妨げなくなるまでルソーを読まなければならない。そして、そのとき初めて、私は彼を理性でもって探求できる³⁹。

カントは自分に言い聞かせようと必死になっている。「表現の美しさ」は「悟性」の働きを妨げると。「表現の美しさ」というきらびやかな言語的装飾すなわちレトリック（修辞学）に惑わされてはいけないと。「理性」でしか把握できない、作品の純粋な、哲学的な意味を読みとらなくてはいけないのだと。しかし、カントの読み方はいささか窮屈なのではないだろうか。作品の意味、内容にしか目を向けようとしていない。

ルソーの作品、特にその説得的言論においては、「表現の美しさ」は文

39 『カント全集』第18巻（角忍他訳）岩波書店 2002年 p.175.

章の意味と切り離せない。「美しさ」に裏打ちされて初めて、ルソーの主張は説得力をもつ。たとえば、学問と芸術の進歩は人間を不幸にするという主張を誰が即座に受け入れられよう。しかし、『学問芸術論』や『ボルド氏への最後の回答』を読み進めるうちに、そのような一見すると非合理的な主張にも一定の妥当性を認めたくなるとすれば、それは、「表現の美しさ」によって説得されたからである。逆に言えば、「表現の美しさ」に頼らずしても読者が納得してくれるような、誰も反対しないような、月並みで、微温的で、当たり障りのない意見などルソーは一語も書かなかった。「表現の美しさ」という説得手段すなわちレトリックがルソーには必要不可欠だったのだ。

レトリックという語を説得の技術という本来の意味で捉え直してみれば、^{レクチュール・レトリック}修辞学的読解の意義は明らかであろう。なるほど、それは「古い方法」ではあるかもしれない。しかし、それは過去の遺物ではない。ルソーという作家が読者に突きつける「問題それ自体」—— まったく受け入れがたい意見を述べているのに同意したくなるのはなぜか、という問題から目を背けないかぎり。